

教師生活を振り返る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 富美恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/6869

教師生活を振り返る

松井 富美恵

1. はじめに

38年間、特別支援教育（特殊教育）に携わって、定年で教員生活を終えた。そして2年が過ぎようとしている。この機会にこれまでの自分を振り返ってみたい。勤務校を異動したときや何かの節目に自分なりに振り返った事はあるが、明文化して残したことはない。残念ながら次に生かすべく整理して具体的につないだこともない。しかも、細かな記憶はあやしくなり、重要な記録も十分に手元に残ってはいない。

そこで、過去に出会って私の教員としての在り方に大きな影響を及ぼしたと思われる先生方や子どもと保護者、そしてその教育の背景などをとおして、私自身がどう学んでいったのか振り返ってみていきたいと思う。ここでははじめの初任校での歩みについて述べる。

2. ろう学校で教員生活がスタートした

大学を卒業後、満22歳の私が新採用教員として赴任した初めての職場は、福井県立ろう学校だった。幼稚部から高等部までのうち、私は幼稚部に配属された。予備知識も経験もなく、一緒に採用になった初任者もいない、先輩の先生方ばかりの職場であった。むろん不安と希望が入り交じっていたが、どこかに（がんばれば）何とかなるだろうといった楽天的な気持ちもあったというのが、学校の玄関を入ったはじめてのころの思いだったように記憶している。元々特別支援教育（当時は特殊教育）を希望していたので、養護学校ではなかったものの「ろう学校」に赴任したことに特に違和感のようなものはなかった。大雑把な把握だったと言えばそうかも知れない。

（1）子どもの前に立った日から始まり、いつしか20年

子どもたちの前に立ち保護者に挨拶をした日から、私は戸惑い、試行錯誤と手探りの歩み、もがきが始まった。“今度こそ、もっと”と毎年毎年もがきながらの戦いが続き、気がつけば20年。結局ろう学校には、20年間という長きにわたり在籍した。今ならあまり考えられないだろう。なぜ20年？と聞かれたらこう答えることにしている。子どもは一人一人顔が異なるように聴力・能力も個性もちがっているの、毎回新しい子どもに出会い、新鮮な気持ちで子どもに向かったのがいつしか20年が過ぎたのだと。長いようで短いあつという間の20年で進歩したのかどうか、これでもか、今度はこうやってみてみたいと考えているうち20年が過ぎてしまった、と言うのが正直なところだ。

（2）私の教員としての基礎は、幼稚部と小学部低学年でできた

私自身は、最初の幼稚部時代、次いで所属した小学部時代に私の教員としての基礎がつくられたと

思っている。当たり前と言えば当たり前だが、赴任当時も「初任研」はあったが、日数も内容もわずかであった。当然だが所属したところで出会った周りの先輩の先生方に私は大きく影響を受けた。その中で特に A 先生、B、C、D 先生、そして E 先生に学びながら実践に取り組み、その中で私が得たことを中心に振り返ってみたい。

私は、幼稚部次いで小学部、また幼稚部そして小学部と校内で両学部を行ったり戻ったりしたので、ここでは学部毎にまとめて記述することにした。

3. 幼稚部での歩み

(1) 最初に配属されたのは幼稚部だった

幼稚部は「一国一城の主」の仕組みではなかった。3 歳児～5 歳児のクラスが 1 学年に 1 学級ずつあり担任も一名ずついるのだが、基本的に幼稚部の教員全 5 名ですべての子どもを見るという考え方だった。子どもの少なさをカバーし集団を確保するため、日々の授業や行事などを工夫して全体合同で行う活動が多かった。学級別の授業ももちろんあったが、合同授業やグループ指導が多く、また校外活動や行事にウエイトを置いていた。その場合、主担当がいて他の教員とで対応する T・T 方式が多かったため、事前事後の打ち合わせや準備、授業後の反省、子どもについての話し合いが絶えず必要であった。そのやり方や雰囲気などほぼ形ができていたところへ私が配属されたため、私はごく自然にその中に入ることができた。私にとっては幸運だったと思う。

(2) 教員が 5 名という小集団が良かった

それには、まず幼稚部を引っ張って運営している主任の A 先生の存在が大きかった。子どもの指導においても部の運営においても中心的存在であり、A 先生を中心にあとの 4 名が協力し合って毎日が回っていた。当時 40 歳代の男性で主任の A 先生の他、母親のような存在の女性の B 先生と C 先生、気軽に話せる 1 年先輩の同世代の男性 D 先生、そして新米の私の計 5 名の教員で構成された幼稚部は、年の差があったこともあり家庭的雰囲気でも居心地が良かった。その反面、日々の子どもの指導に関してはとても厳しいものがあった。はじめの頃、先輩の先生の指導ぶりを見せてもらうことは多かったが、見るのと自分がやるのとは大違いであった。子どもにとって学校生活の最初のスタートである幼稚部だからこそ、その後の成長を左右する入り口での失敗は許されないのだ、という思いが常に私の心の中にあった。張り切っていたのだが、気負い過ぎもあったかも知れない。

(3) しかしその中での実践は難しく、毎日が子どもとの戦いだった

はじめは担任など持たせてもらえなかった。しかし、だからこそ与えられた役割を果たすことは勿論、それ以外のことに全力を尽くしたいと思っていた。でも、思いはあるもののろう学校の教員免許もなく実践力も備わっていなかったため、私にとって「力をつけること」は必須課題だった。それで、やってみないことには何も分からないと思い、やらせてもらえることは何でもやってみようという気持ちで授業や校務はもちろんそれ以外のことに喜んで取り組んだ。また、当然聴覚障害児の理解や聴覚障害児の指導についての勉強には必死に取り組んだ。が、子どもは待ってくれない。頭で理解するだけでなく実践の中で学ぶ事が大切で、両方平行して進める必要があった。チャンスがあれば先輩方の授業を見せてもらい、学ぶ日々だった。幼稚部は、幸い教員同士の関係も雰囲気もよく、また 5 名という小集団であり、互いのコミュニケーションが取りやすくまとまりやすいのが良かった。年齢構成の点でも、C 先生の 1 年後にやってきた若い私を育てようとする空気があったと感じた。

しかし、子どもの指導は非常に難しかった。その内容はたくさんあるが主なものを次に挙げる。
 ○まず第一に、子どもは耳が聞こえない（聞こえにくい）ことである。従って、情報は主に目から入る。心身の成長、発達にことばを伝えるようにすることはいつの時代も不可欠であり、それ故「言語

指導」がろう教育での、特に基礎期における指導の中心課題であった。今は「自立活動」であるが、当時の「養護・訓練」の内容は、ことばやコミュニケーション力をつけることが中心であった。幼稚部の生活も、どの活動においても「ことばの力」は必要不可欠であるし、言語力をつけることは聴覚障害児にとってどの年齢段階であっても常に大きな課題である。指導にあたっては、視覚を中心に、触覚や皮膚感覚、味覚、痛覚、そして第六感をもフルに働かせ使うことが大事だ。そのことから授業や行事などを計画し具体的な指導法を練り考えることが必要だった。簡単ではなかった。3歳の子どもは興味が持てなければ全くと言っていいほど授業に見向きもしなかった。一応入学前の教育相談はあったが、最早期から対応が始まる現在と異なり、当時最初の学校生活は3歳児から始まるのが殆どで、それまでは聞こえない子どもとして、狭い生活経験しかない子どもたちである。仕方ないが、3年間で基礎を作り小学部や小学校へ送り出せるよう前段階としての力をつけさせなければならない。数多くの失敗を重ね反省の毎日だった。子どもの心をつかみ、心に沿わなければ授業にはならなかった。これがまず一番難しかった。A先生を始め他の先生達には、こちらから働きかけないかぎり助言などももらえなかった。当たり前だろう。助言のしようがない。

○**第二に、母親指導の重要性と難しさである。**小さい年齢の子どもは、学校での生活以外殆どの時間を家庭で過ごし、かかわる主体は殆どの家庭が母親である。となれば、聴覚障害に気付いた時点から何とかしなければいけないが、我が子をどう扱ったらよいか分からず、保護者是对応の手がかりを内外に求める、教師に頼るなど、絶望からはい上がり苦難の道を歩み始めた母親に寄り添い道しるべを示すのは、当然ながら我々教師の大きな役割だった。母親の不安や悩みを聞き、時にはカウンセリング的な対応も必要だった。父親はもちろん家族の協力なくして子どもの養育や指導は出来ない。そのような立場の母親を励まし、望ましい親子関係を築いてもらうことが大切である。そのため、子どもへのかかわり方の見本を示したりアドバイスしたり、さらに補聴の相談・指導なども行わなければならない。その意味で、幼稚部の母親は、子どもが学校にいる間は付き添い授業参観を行うのが通例だった。毎日母親が教室での授業をしっかりと見てメモを取るの本当に緊張した。そして私達教員が、必要に応じ子どもへのかかわり方などについて個別に母親への指導をするのが当たり前となっていた。このことの意義が大きいことは理解していたが、実際実践するのは厳しかった。保護者への説明責任があるし、しかも保護者から評価されることにもなるからだ。それで、子どもの指導には教材研究はもちろん個々の指導のねらいの確認など、とても神経を使った。思い返せば保護者との大きな摩擦もなかったのは、当時まだ若くて未熟な私に対する保護者の温かいまなざしがあったおかげと思っている。

○**第三に、わずかでも残っている聴力を最大限に生かすことであった。**生活力をつけ言語指導を有効にするためには、わずかな聴力を生活や学習に生かす手だてをとることはきわめて重要である。聴力検査の結果をもとに補聴器を着け残存聴力を活用できるように指導することは不可欠で、ろう学校教師の資質であると思っている。ところが、子ども一人一人全く異なっていて、これはなかなか難しく当時どの教員も出来るわけではなく、ややもすると堪能な教員に任せざるを得ない傾向があり、はじめはほとんどA先生に頼っていた。当初聴力検査も満足にできず補聴器や補聴器の調整のことも分からなくて困ったが、どうにか出来るようになってきたのはずっと後である。少しでも聞こえを確保することは、ある意味で授業や行事などの指導以前の、教育環境を整えることに入るのかも知れない。しかし、聞こえる環境を整えるばかりか、聞こえを活用できる子どもに育てることはきわめて重要で且つ至難の業であった。

当初教育相談を担当していたこともあり、補聴器を着ける指導を始めたばかりの2歳児のことを思い出した。当たり前だが、耳に違和感がありじゃまであり、着けたくない気持ちがよくわかるよと言ってあげたいくらいいやがっていた男の子に出会った。母親は必死だが、言うことを聞いてくれず(聞こえないので当然?)お手上げ状態。教員の方は分かっているのであわてない。一瞬でも着けること

からスタートし、徐々に着ける時間を長くしていく。そして必要な間着けていられるようになるものであるが、個人差がある。不安で焦る母親を安心させ頑張ってもらうように母親へ対応するのは教員の大事な役目である。補聴器を着けられるようになって指導（聴能教育）が始まるといえるかもしれない。行く行くは子ども本人が自分で補聴器の不調を見つけるくらい管理が出来るようになることが理想で、そのくらい重要である。補聴器の性能が今ほど良くなく当時はボックス型が殆どで、子どもにとっては活動のじゃまになり落ちたりぶついたりすることもあったので、母親は補聴器を入れる袋を工夫して作っていた。また耳の状態を清潔に健康に保つことも重要であった。赴任した頃は口話教育全盛期で「読話」が中心であった。特に基礎期の幼稚部、小学部時代は手話の使用は禁止ということで、補聴器を装着して聞こえを少しでも確保し活用できる子どもを育てることはとても重要だった。しばらくして「キュードスピーチ」や「指文字」も取り入れられたのだが、保護者にとっては、藁にもすがる思いだったに違いない。

○**第四に、資質向上のための研修の問題。**いつの時代も教員の資質向上は重要な課題であろう。ろう学校は県内に1校しかなくて、ろう学校同士の交流の機会は非常に少なく、手間もかかる。赴任当時、福井校は北陸ではなく近畿地区の研究会に所属していて、各学部の研究会などには近畿地域の担当校まで行っていた。のちのち北陸地区に加入したが、また各種研究大会や協議会などは東京や他県で開催されることが多く、参加できる機会は限られていた。そのため自主研修や講師を招いての校内研修に頼ることは多く、C先生や校内の他の教員と勉強会を持つことも度々だった。しかし、私と同期の教員は校内になく年齢の近い教員もきわめて少ない時代だったこともあり、指導や仕事などについて悩みや疑問を気軽に話し合うことはあまりなかった。残念だったなと思う。

（4）私達が大事にして、私が学んだことは

このように厳しかった幼稚部での生活であったが、5名全員が、子どもがことばを使う生活や学習が出来ることをめざして同じ方向を向いていたことは間違いない。それは、保護者とも同様で保護者を味方にしないと何事もうまく進まないような気がした。聞こえない世界から聞こえる世界に導き幼児としての発達を推し進めることである。そのためには、3歳児からの教育開始より少しでも早い方が良いということで、早期教育の重要性が強調されるようになり、全国的に急速に体制が整えられ始めた。また当時はインテグレーションが盛んになり、ろう学校幼稚部に在籍しつつ週に何日か地元の幼稚園へ通い健聴児と交わり生活を経験する子どもも出てきて、保護者の願いとも重なり、教員にとっているいろいろなことを考えさせられた。また幼稚部では、遊びや生活経験の重視、言語活動の活発化の観点から、季節に応じた行事や校外活動を大切にされた。そのための計画や準備、事前指導、当日の役割、実践と結果、事後指導が一つ一つの行事や活動について回った。指導者が一つでも何かを誤ったり不適切だったりすればたちまち子どもの学習のチャンスを奪い、他の教員に迷惑をかけるのだ。同じことが保護者にも言える。例えば、当日持ち物一つでも不備があったり、登校するまでの途中でトラブルや身体の不調でもあれば、やはり子どもにとって学習にならないだろう。まあ、それはそれで、「トピックス」でありとても良い言語活動の話題材料となるのだが。だから教員側も緊張していたが、保護者も気を抜けない。保護者の学校・教員に対する協力は私達教員を支えた。ことばの力を中心に子どもの力を伸ばし、保護者の信頼を得られる教師になることが目標でもあった。

日々取り組む中で、私は少しずつ**教員同士のチームワークと自分の役割への責任の大切さ、そして保護者との信頼関係と協同して歩むことの重要性**を学んだと思っている。このことは現在にも通じることで、いつの時代も当たり前に必要なことであると改めて確認している。

4. 小学部での歩み

（1）低学年の担任としてやりがいがあった

幼稚部の次に小学部低学年 1 年生の担任となった。幼稚部で見ていた子だったので、子どもの実態把握については大きな戸惑いはなかったが、教育課程を始め教員の顔ぶれが変わったこともあり、新たな気持ちで子どもたちに向かった。国語、算数などどの科目であってもことばなくして指導は出来ない子どもにとっての学習も成立しない。それ故言語力の向上は何にも増して、決して焦っていたわけではなかったが、最優先の課題であると考えていた。このことは基本的に幼稚部時代と変わらない。上の学年に進んだときに困らないように。経験の重要性については先に少し述べたように小学部においてもやはり重要だと信じていた。私は、子どもが経験したことや家庭での出来事を材料にして、その時の出来事にまつわりかかわった人や子ども自身の気持ち、考え、行動などをじっくりしっかり人に伝えたり考えたりすることを大事にした。コミュニケーション力をつけ、ことばで物事を考えられるような思考力を身につけた人になってほしくて。1 分 1 秒も時間を無駄にしたくなかった。放課後は徹底的にやりとりする個別指導を行った。今やらないといけないのだとの一念で。保護者も子どもも本当につらかっただろうと思うが、よく努力しついできてくれたと思っている。チャンスがあれば、何十年も前のその頃の子どもたちや保護者たちと話し合ってみたいものだ。まだ機会はない。

(2) 保護者や E 先生に支えられて学んだ

小学部低学年では基礎的な力をつけるんだ、と張り切っていたこともあり、私の希望が叶い、持ち上がりで 1, 2, 3 年の担任をさせてもらうことができた事は、私にとって大きい意義があった。言語力をはじめ各学年での各教科の指導で、やりたいこととやらねばならないと思っていたことを 3 年かけてできたことで、やり終えたという満足感を感じたことも事実である。

当時小学部でも、通常の授業のほか季節折々の行事や校外学習を取り入れ力を入れていた。行事や校外学習を通して、机の上ではできない直接・間接経験と学習ができ、意欲や自主性の向上、社会性の育成などが期待できた。小学部高学年の担任の中に、私より一回り年長の女性 E 先生がいらした。E 先生は、学部主任ではないものの学部内の会議や行事の計画、準備など様々な場面で前向きな発言や姿勢などが見られ、私には頼もしい存在となった。子どもたちへの指導も丁寧で当を得ていて大いに刺激を受けた。決断力にも優れ、私のクラス運営のことで迷ったときなど、親身になって相談に乗ってくださり助けられた。そのうち、部内や校内の仕事のことで「松井さんはどう思う？」と E 先生から尋ねられることもあり信頼関係が増した。E 先生から学んだことはたくさんあるが、今でも通用し実際に使っているのは、「ねらいと計画」「段取りの重要性」である。

(3) やはり子どもから学んだが、その学びを還元したのか

どんなに段取りして準備し臨んでも計画通りに進むことはまずなく、ハプニングや失敗はつきもののようなもの。それも実践本番でどう扱えるか、そしてその後どう始末し次につなげるかも非常に重要なことだった。どんな指導場面でも同じだと思うが、指導能力が問われていた。「あの場面はどう扱うと良かったのか？」いつも自分に問いかけていた。このようなことを当時はなかなか口にできず、つつい自分の中だけで解決を求めていたことが多かったように思う。大学のラウンドテーブルのように先輩も後輩も同じテーブルで、口に出し話し合い聞き会える場があれば、共有化されもっと前に進んだはずでは・・・どんなに素晴らしかったか・・・と残念でならない。小学部から高等部までは普通に担任制なので、そんな雰囲気も機会もあまりなくて教員個人任せで、せいぜい個人的なつながりに頼っていた。

また後輩が増えてくると、会議などで子どもの指導や自分たちの研修のことについて学部主任や年配の教員と若い教員の間をつなぐ役割が多くなってきた。会議では、所属教員の年齢差が大きかったこともあり、有意義な中身にするために話しやすい雰囲気をつくることや根回しをすることに気を配

った。また研究会や研究授業などでの役割も多くなり率先して行動してきた。そうはいうものの指導に関していつも思っていたことがある。幼稚部とか小学部とかに限らないのだが、子どもの反応や様子、態度、言動が私を導いてくれたと言うことである。子どもをよく見ることが大切だ。私が言えるのは、「子どもが教えてくれる」「子どもが示してくれた」ということ。つまり、よく言われるように、「子どもから学んだ」のだ。心からそう思っている。

指導経験が増えるにつれ、次第に自分の実践の中で蓄積してきた学びである、聴覚障害児の指導にあたっての重要事項・指導マニュアルとでも言うようなものが、私の中にたくさん積み上がってきていた。それは自分の胸の中に納めておいてはいけないものだと言う意識が強くなって（どうにか形ある物にしなないといけないなあ）と思っていたまさにその頃、1年先輩のD先生から「まとめてみよう」という話が来たので、渡りに船とばかり応じた。それはわずかであるが、昭和61年度研究紀要の幼稚部共同研究にまとめられた。

振り返って、そのような学びの経過とでもいうものを他の教員達と語り合う場が少なかったのは残念で、今も心残りである。

（4）子どもたちの成長ぶりを追い続けられなかった

私は、幼稚部と小学部低学年所属し行ったり来たりしていた。担任を離れ次の学年に進級した子どもたちと直接かかわる機会は殆どなかったため、どのように成長しているか分からず外から見ているのみだった。担任した、しないにかかわらず、同じ学校にいたのだから中学部や高等部で子どもたちの成長にかかわることが出来たならば、そこでの学びをまた低年齢の子どもへの指導に生かすはずだなどと考え、ろう学校の教師としては中途半端で不十分だったのではないかと。ずっと後悔にも似た思いを抱いて振り返っている。

5. おわりに

しっかり振り返ってみたいと取りかかったのだが、実際には記憶も断片的、資料も少なく断片的で満足できるものとは言えないものの、この機会に是非取り上げたいと思っていた聴能教育や母親指導のことなどについて記述したと思う。そして感覚障害であれ知的・身体障害であれ、指導をとおして相手が本当に学ぶとはどういう事なのかを知ることは難しいと改めて感じている。学校という学びの場と教育環境が非常に重要な働きをしていることは確かだ。私は縁あってろう学校で、その時その場所出会った幼児・児童や保護者に一生懸命かかわらせてもらった。温かく厳しく育ててもらったA・B・C・D先生、E先生をはじめ教職員や関係者、毎日と一緒に遊び、戦い、交わり学ばせてもらったろう学校の子どもたちに感謝したい。

一方学びを形ある物にできたか、自分だけでなく皆の学びにできたかとの問いには、全く不十分であった、と言わざるを得ない。日々記録や映像で振り返り、話し合い、子どもの様子を確認し、次の活動への取り組みに生かすのが定着した平成3年度末でろう学校生活が終わり、私は養護学校へ異動することになった。

障害児教育を特殊教育と言った時代から、平成19年度に特別支援教育となり、現在も脈々と教員と子どもたちの営みが続いている。

参考文献

- 福井県立ろう学校（1976）「昭和50年度研究紀要」
- 福井県立ろう学校（1977）「幼稚部10年の歩み」昭和52年12月
- 福井県立ろう学校（1978）「養護・訓練の指導」昭和53年10月18日
- 福井県立ろう学校（1978）「昭和53年度教育計画」

福井県立ろう学校（1987）「昭和 61 年度研究紀要」